

研修成果報告書

私たちは 7/25~7/29 日の機関で大阪研修を行った。

施設概要

NPO 法人子どもの里

2つの信念をもととして運営している。

一つ目は、こどもの最善の利益を考えること。安心して遊べる場・生活の場と相談を中心に、常にこどもの立場に立ちこどもの権利を守りこどものニーズに応える

二つ目は、こどもの自尊心を守り育てること。自分に与えられた境遇の中でこども(人)のもつ「力」を発揮、駆使してたくましく生きているすばらしいこどもたちを、社会の偏見や蔑視から守り、自信を持って自分の人生を選び進めるよう支援すること。

事業内容として大阪留守家庭児童対策事業（学童保育）、小規模住居型児童養育事業（ファミリーホーム）、大阪市地域子育て支援拠点事業（つどいの場）自主事業として緊急位置維持保護・宿泊所、エンパワメント事業、訪問サポート事業、中高生・障碍児居場所事業などを行う。

NPO 法人釜ヶ崎のまち再生フォーラム

「釜ヶ崎地域において、フォーラムやワークショップを実施し、構成する住民層の暮らしを再建する方向でのまちづくりビジョンをさぐり、あわせて事業化を促進するフォーラムは、やる気のある個人のネットワークだからこそ、役所まかせではない、住民の意志をくんだ自発的なまちづくり活動の展開をめざす。参加者それぞれが、まずは個々人の自由な立場と自由な発想に打ちかえることで、ワークショップなどを通してまちづくりビジョンをさぐり、それを共有化し、その事業化のヒントをもさぐる。結果として地域の諸団体すべてが共通のまちづくりビジョンに向かってゆるやかに協働していく

NPO 法人暮らしづくりネットワーク北芝

地域で暮らす人たちが「出会い・つながり・元気」を求め、「誰もが安心して暮らせるまちをつくりたい」という地域の人々の想いを共有し、知恵を出し合う「暮らしづくり」の協働活動を進めてる。それを実現するために 3つの機能、事業を生み出し育てる（インキュベーター機能）、事業同士をつなぐ（インターメディアリー機能）、事業の経済支援（ファンド機能）を担っている。

研修について

NPO 法人子どもの里では、先ず子どもたちと交流することから始まった。交流を通じた印象としては元気でやんちゃな子どもたちという印象であった。また、どんな子どもであろうと受け入れる最後の砦としての役割も担っているため、多様な子どもたちが一緒に遊び生活をしている。昼間から夜までの時間は子どもたちとの交流の時間とし、夜は代表の

荘保さんによる DVD を交えたレクチャーを行ってもらった。そこで知ったこととして、私の想像を超えて子どもはもちろんだが、その親が抱える問題の深刻さ、また複合的に様々な問題を抱えているため問題の根深さを実感した。

NPO 法人釜ヶ崎のまち再生フォーラムでは、釜ヶ崎スタディツアーに参加をし、講義とともに西成区の街歩き、また元野宿生活者の方からのお話を聞くことができた。講義の中では釜ヶ崎がなぜ日雇い労働者の町となったかの歴史から始まり、野宿生活者の暮らしぶりについて実際に町を歩き、目にすることでより深い理解へとつながった。

NPO 法人暮らしづくりネットワーク北芝では、地域のニーズを汲み取り、様々な事業をどのように行ってきたのかについて講義を通し学び、地域づくりの在り方について知ることができた。

考察

この大阪研修を通して学んだことと現在、実習中に学んだことを含めて考えると行政と NPO では支援の在り方に対する考え方の違いがあるように思う。行政の支援の在り方として、全体の利益を追求し、一歩引いた視点で支援を行い、NPO の支援の在り方として一人一人に寄り添い、同じ視点に立って支援を行うという違いを感じた。行政は右から左に型にはまった支援を行い、支援者としては距離を置く。時には対等な立場ではなく、上に立ち施しを行っているのだという態度にも思える。一人一人、それぞれに合った支援を行う NPO の支援方法とは大きく違ったものである。様々な問題であったり、複合的な問題が絡み合っているケースや一見同じ問題のように思えても人が違えば、その人が本当に何が必要としているかは違うはずである。長年、生活困窮者で生活保護を受け続けているという人もいる。過去の支援内容を見ると本当にこれが支援の在り方であるのか。もっと他に手段や方法があるはずだと疑問に思うケースも少なくない。行政の職員の中には福祉職採用ではなく、新人で対応しなければならず知識も知らない人や職員体制の厳しさ、時間的な厳しさはもちろん、あるのではあるが職員同士が助け合うことや研修を通して知識を身に着けること、他の機関と連携を取りつなげるなどのことはできるはずである。もちろん福祉的な考えを持つ職員もいるのであるが、福祉課全体として共通の福祉的理念を持たなければ意味がない。

荘保さんが言った「問題を抱えた人自身に問題があるのではない、それを受け入れる器のない社会に問題がある」という言葉が印象深い。障害の分野でも社会モデルのように除外はその人ではなく、その人の周りにある環境や社会の中に障害があるという考えがある。障害や貧困、孤立など様々な問題で生きづらさを感じている人たちを救うためには社会の仕組みや制度、考え方を変えていく必要がある。健常者、目が見える、歩ける、経済的にも困っていないなど大多数の人に合わせた社会の仕組みが作られてしまっている。生きづらさを感じる人を減らし、誰もが生きやすい仕組みであったり、生きやすくなるよう補える制度作りが必要である。

暮らしづくりネットワークでは多種多様な居場所づくりを積極的に行っている。あるコミュニティが自分にとって合わなかったとしても、別のコミュニティがあることで自分が自分らしく生活できる場所があることが大切であるからだ。居場所という点では、重度障害者が施設に入所をし、そのまま人生を終えてしまうケースもある。身寄りがいない、ほかに場所がないからといって施設から出ることができないのである。こういったケースは重度障害者だからというわけではないだろう。他の分野でも言えることである。できないことに対してそれを補うだけの支援があれば同じように暮らすことも可能になるはずだ。

大阪の西成区や北芝ではいまだに地域差別、部落差別が残っている。その地域に住む内部の者として外部の差別に立ち向かうということだけでなく、本人が自分が生まれた土地、地域を愛し、自尊心を持つことも大切であるという話も伺った。差別を受ける内部のものとして、きちんと学び自尊心を持てるように教育をしていくことが大事である。そして、差別をしないためにも誰もが学ぶ知ることが差別問題でも重要になってくる。地域差別、部落差別だけでなく、障害者差別などあらゆる差別に共通することではないか。正しい知識がないからこそ、偏見が生まれ、偏見が差別へとつながっている。生きやすい社会、仕組みづくりのためにも臭いものには蓋をするという考えではなく、時には目をそむけたくなることでも大人がしっかりと学び、子どもへと教えていくことで差別は減っていくはずである。

暮らしづくりネットワーク北芝では、過去の住民意識として、いつか・誰かが・どこかで・なんとかしてくれるという行政任せの甘えや依存的な意識があったそうだ。そこから誰もやらないなら自分たちでやろうと変わっていった。地域の人たちそれぞれが持つ、大なり小なりのニーズを発掘し、それを実現するまでに至る行動力や企画力がある。確かに、それが実現できるのは北芝という小さな地域と住民性などの特異な点はあるのかもしれない。しかし、誰かがなんとかしてくれるという受け身の姿勢ではなく、足りないものがあるなら自分たちで作ってしまうこと、必要な制度があるのならそれを訴えかけるという積極的な姿勢はどこの地域、どんな人でも見習う必要がある。

NPOの姿勢、心を持ち、行政の権限、規模があればより多くの人にとって暮らしやすい国になるのではないかと思う。今回の国内研修で学んだことを生かし、今後とも学んでいきたい。